

優劣はない。大事なのは、どちらも有効に使う、使い倒すという姿勢そのものにあると思う。

自分自身、当初はアニメや漫画に対する認識も浅く知識もある方ではなかった。それでも何とかコンテンツを送り出す側でいられたのは、この「姿勢」があったからだと思うし、それを継続していれば自ずと「知識」「干もの」への関心・興味・欲求も湧いてくる。本来、若者は流行や社会現象に敏感で関心も高いはずなのだが、その興味が「役に立つもの」と思っていないフシがある。それは従来受けてきた教育の賜物でもあるのだが、少し見方を変えよう、という気持ちで臨んでいきたいと私は考えている。量を増やすことを早めに諦めてはいけませんが、知識の量の差だけでビジネスは決まるものではない。

幸い、メディアやコンテンツに関する話題や動きはほぼ毎週のように報じられている。この生の情報の意味や位置づけを考えることを通して、若い人たちには「半歩先」を見つける訓練をしていってもらいたいものと思っている。

教育の現在と未来

三 好 敏 之 (人間心理学科教授)

先日、ベトナムのダナン師範大学を訪問した。私は、大学生や大学院生、大学教員や関係機関の人々が動作法を真剣に学び、積極的に質疑応答する姿に感銘を受けた。この国では、平均給料が2～3万円である。ダナン市には海辺があり、住民は朝5時頃から散策、ヨガ、軽音楽をかけてのダンス、砂浜ではビーチバレー、ダーカウ（重い羽根を足の内側、外側、時にはクロスして太腿、胸、頭等も自由に使って羽根が落ちないように続けるスポーツ）をいろいろな年齢層が楽しんでいる。海辺の活動はグループで行っている。どのグループに入っても気楽に参加させてくれて自然とコミュニケーションができて、楽しい。また、遠浅の海で海好きな人は、朝から両脇に軽いペットボトルのような浮をつけて海をゆっくりと歩くのである。私も海に入って散歩した。とても気持ちのよい体験であった。その後のシャワーで身体がよりすっきりした。多くのダナンの市民の方が朝から活動し、家族同士でレストランや屋台で外食し、とても楽しく会話している。それぞれが自分の人生を楽しみ、家族や仲間とのコミュニケーションを楽しみ、安い給料も気にせず働いている。私は、彼らが日本人よりも生き生きと暮らし、笑顔が多く、表情がよく、人生を楽しんでいると思った。

今の日本はどうであろうか？情報化が一層進み、経済の発展と共に、核家族化が益々進んでいる。そのため、地域での人々のつながりは薄れてきて、日本人自体が何か疲れている感じがする。

教育においてもいじめや不登校、非行などをはじめとして、校内暴力や学級崩壊が多く見られる。学力低下や受験戦争、活字離れなどの問題も進んでいる。これらに加えて、外部的な要因として都市化や少子高齢化も深く関係しており、それと共に学校裏サイトやラインいじめなどの問題も関わってきている。学校教育制度自体の問題も、教育問題として非常に深刻化している。受験やそれに伴う学力差の発生、学歴主義なども広く知られている。大学倒産時代をは

はじめとして、家庭の経済状況による教育の差や、公費負担の問題も軽視できないところである。

私は30数年間特別支援学校の教員をしてきた。時代と共に安全面の確保、健康面での配慮を行う子どものケア、家庭で不安を感じる保護者のケア、通学上でのトラブル、子ども同士のラインでのトラブル処理、学力保障、子どもの情報整理の書類の整理、地域での啓発化の行事、関係機関との子どもの情報の共有化等、数々の教員の仕事が年々舞い込んでくる。現場での教員同士の会話が少なくなり、パソコンに向かう日々になってきている。このような現状の中、現場で子ども一人一人の内面によりそい、個性やこれから生きていく土台となる成長の力の育成がどうしても表面的になってしまっていたと感じている。

私は、現場の忙しさが不登校の多さやいじめ問題にもつながっていると考えている。学校が多忙になると教員は、どうしても一人一人の子どもを生かす教育が表面的になり、子どもの抱える内面のゆれ、不安に対処できなくなってしまう。それを学校制度で行おうとするとどうしても無理がでてきてしまう。学校では、自由に話せる雰囲気は少なくなり、教育制度だけに動かされてしまい、肝心なことが見えにくくなっている。仙台のある中学校におけるいじめによる自殺の問題にもこうしたことはつながっているのではないだろうか。今まさに教育現場では、特別支援の障害のある子どもを生かし、子ども一人一人の内面によりそい、個性を育てる学校チームが必要になっている。

文部科学省による「不登校」の定義は「長期間に及ぶ理由がない欠席」というものである。しかし、実際に「不登校」の状態に至る子どもの中には、様々な理由を抱えている者が少なくない。学力や受験における悩みをはじめとして、家庭環境や学校でのいじめ、学級崩壊などが原因となっている場合がある。日本では教育における公共支出の比率が少なく、学業サポートが受けられない子どもが多い。また、地域の体制づくりの弱さもある。たとえば、完全学校5日制や総合的な学習の体制が導入されていく中においては、開かれた学校づくりと特色ある学校づくりが求められている。これらを実現するためには、保護者をはじめとして、地域住民の学校運営の協力、参加、支援を欠かすことが出来ない。児童館や学童保育等の対応も必要になってくる。しかし、これらの整備には地域差があり、部活動の在り方をはじめとして、教員側の負担になっている。

このように、教育の問題が時代と共に変化し、多様化してきている。ある時は学級内での対応が求められ、ある時は家庭内での問題解決が求められている。今後多様化してくる問題に、よりスムーズに対応できるように、対処プロセスの整備が求められている。また、問題解決と同時に、子どものケアを進められる仕組みを作るべきである。

現在の日本の教育で最も求められるのが、「創造性を身につける教育」であると私は考えている。日本が最も身につけてきたのが「選択する力」であり、これをあらゆる教育場面での学習で生かしてきた。それが経済発展にもつながり、社会に適合する力にもなってきた。しかし、諸外国を見て、今後日本が生き伸びる力として「創造する力」が求められていると私は思う。何かを想像し、実際に創造し、社会に生かしていく力である。グローバル化して世界に導いていけるのがこの力の育成である。私達の尚絅学院大学は小さな大学で少人数を大切にしている大学である。本大学は少人数ゆえに学ぶ楽しさ、討論して新たな考えを生み出している学生が多くいる。授業の中で今後、話し合いやグループ討議をしながら、学生同士が、あるいは教員が学生と一緒に答えを創り出すことが益々必要になってくる。それには教員同士が絶えずこのような場を多く体験することが必須条件になる。

日本の教育で評価されるのは、「答えを探し出す力」である。しかし、答えを創り出す人もいる。「答えを探し出す人」の育成が進むと、答えを創り出す力も持っていないのかもしれないのな」と勘違いする人が多くでてくる。たまたま環境があわなかっただけで、自分の能力を最大限に発揮せずに終えることにもつながってしまう。本大学では少人数を最大限に生かし、本質的な話し合いを授業の中で生かすことができる。校外にでて体験ワークもいいたろうし、テーマを決めてグループディスカッションもいいたろう。それには教員同士でもそのような機会を多く持ち、自由に話せる場が必要になってくる。

幸い本大学においても新たな大学改革をしようとしている。選出された委員だけで大学改革をまとめていくのではなく、学科会で委員が一人一人の教員の意見を聞き、さらに良いものにしていく討議を積み重ね、それを委員会ですべてまとめあげ、今後の大学改革で生かしていける絶好の機会が今まさにある。チーム尚絅学院大学が関わっていると思う。

学問では間違えることを恐れては進歩がない。人生の選択を間違いたくないと誰もが思っているであろう。しかしこの思想が人生をつまらなくしていく。「間違いなく」の裏には「みんなと一緒にしとけばいいや」があるだろう。「みんなと一緒に」を別の視点から見れば「誰でもいい」なのである。

「選択を間違ったらいけない」という教育にしてはならない。自分で考え、多様な思考を創り出す教育が求められる。それには、大学のボランティア活動、海外のスタディツアー体験、野外の自然体験活動、部活動、大学の学食で行われている食育、優れた芸術文化に触れる機会を多く体験させる等の取り組みの更なる推進が重要である。また、本大学は地域住民に生涯学習の機会を提供している。地域の人が自由に学べる機会を多く持つことが、新たな自由な発想を創り出す源になっている。今後も更なる推進と奇想天外な取り組みが私たちの教員の発想を高くしてくれると思う。

本大学はキリスト教精神に基づき、一人一人の学生の内面を大切にできる大学である。少人数制の授業を更に生かし、この豊かな自然を更に生かした体験学習も多く取り入れて欲しい。今後の日本を支える創造的な人間づくりのできる学生を本大学の教員が一体となってやっていたい。そのような魅力ある大学が今私たちの知恵と協力で実現できると思う。

私達教員一人一人が失敗を恐れず、将来の日本を支える学生を育て、日本の将来を支える最先端のチーム尚絅学院大学となって取り組んでいきたい。

障害を持った人々との出会いから得てきた経験と学び

小松 秀 茂 (子ども学科教授)

はじめに

自らの経験を現在の教育にどう生かしているかの観点から書くようにとのご依頼をいただいた。筆者のこれまでの来し方の紆余曲折があまりにはげしく、整然と述べることなど困難であるが、保育者・教員養成教育の場に身を置きつつ、障害を持った人々との出会いが多かった我が歩みを、思うままに振り返ってみたい。